

一人の小説家がいる。彼が書く作品は皆口をそろえてすばらしいと賛辞をおくる。個人的な好き嫌いで否定的な言葉があつたとしてもそれはそれ。そのような人達であつても彼の作品の出来に対する評価は正当なものだ。嫉妬といった本来作品そのものの評価に関係はしない。どうでもいい感情は淘汰されてしまふ。しかし世の中には賛辞が多ければ多いほど受け入れられない人がいる。しかもそう言う人に限つて内容には触れていない、もしくは理解しようとしていない人が多い。大多数に良しとされているものを陥れることで自分以外の人は違ふと少しばかりの優越感に浸ろう躍起になつてゐる。くだらない。だからこそ彼の、本当の作品を目の当たりにするとひねくれた癖はどこかへ出かけてしまふ。具体的に言えば一ページの最初の数行を読んだだけでどうでもよくなつてしまふのだ。純粹な、あくまで小説としてだけのクオリティだけを読者に感じさせる力を彼の作品は持つ

ている。絶対的な強制力とでもいうべき力が彼の文章には生じてしまう。この境地までくると一つの芸術品としての価値を見出す者が出てくる。実際、彼の書く作品書く作品高値で取引されてしまう。本としては法外な値段がついてしまう。彼の全作品の原稿を集めようとすると国が傾くとまで言われるほどだ。また、彼の小説が他人に与える影響も計り知れない。一度読むと惹きこまれ、二度読めば己を狂わされ、三度読めば新刊を待ちきれず発狂して死んでしまう。なんてことまで言われている。真偽はともかくそれだけ読者に影響を及ぼす。悪いかどうかは関係がなく無作為に影響をまき散らす。これは作る側、つまり作家たちにも言えることだ。同じ道を歩む者たちは己の無力さを痛感させられ筆を折る。たとえ折らずとも自然と書くものすべて彼のものと似通った書き方になってしまう。それは作家としての『死』を意味している、と私は考える。作家として殺されてしまう。何も

かもが歪み、狂わされてしまう。自己を保てなくなってしまう。分からなくなってしまう。自分の言葉を、思考を書いているつもりでも強制力が働いてしまう。どうにもならない。どうしようもない。諦めることしかできない。それほどすばらしい。

しかし。そんなにもすばらしい彼の小説に足りないものがあるとこれまた皆口をそろえて言う。それは『死』。彼の作品は死人がいなということだ。これだけ聞くと別段何も問題がないように思えてしまうが、残念ながら彼の小説のジャンルはミステリー。しかも日々の喧騒で見過ごしてしまいがちな謎を解き明かす日常ミステリーではなく必ず死人が出て犯人がいる本格ミステリー。さらに言うと本格ミステリーのなかでも突出したグロテスクな死の描写があるのが彼の小説だ。いやこれは希望的観測だ。本来なら突出したグロテスクな死の描写がないといけない小説なのだ。ただ死人がいらない。死人が出ないわけ

ではない。死人がいない。そのような誤解まで及びかねないほど彼の作品の『死』は生き生きとしていない。先ほどから書いている通り、彼の作品はすばらしさに満ちているが唯一と言っているほど弱い部分が死人の描写だ。読者に、作家に死を与える彼の作品が死を感じさせないというのは笑えない冗談だ。具体的に書いていても遠回しに書いても意味がない。薄っぺらいのだ。そこが重厚で肉厚な文に紛れて出てくるので違和感があるのだ。疑問が出てくるのだ。本当にこれは死んでいるのかと。批評家たちに言わせると彼が死というものを本当の意味で理解していないから起きる矛盾だという。私もそう思う。他の誰よりも彼に近いことを自負している私には何よりもそのことが分かってしまう。だから私が彼に『死』を教えるあげようと思う。いや、教えるじゃない。経験させようと思う。最初で最後の経験を体感させてあげるのが私の最期の役目だ。

使命と言ひ換えてもいい。これは彼に狂わされた一人として、彼に誰よりも近く誰よりも尊び誰よりも愛し、そして誰よりも彼を憎んでいる私にしかできないことだから。元々私も小説家だった。いや、正しく言うなら私は小説家ではない。どうしてこんなややこしいことを言っているのかというとそれは私の小説家としてのスタイルが原因だ。私の小説家としてのスタイルは作家としての自分をやることだ。キャラを作り、演じること創作意欲を高めたのだ。普通の臆病な私なら決して言えないであろう己の恥部であったり世間に対する不平不満、恨みつらみを小説家としての私になりきることで容易く書いていくことができた。彼は私とは違いおおっぴらな人物であることを設定としていたので己の恥部を登場人物に背負わせたり時事的な問題発言であろうと書いていった。そうすることとで私だけど私ではない小説家が誕生した。つまりは彼だ。幸か不幸か彼の作風が受け入

れられ、処女作である小説はそれなりに話題作として取り上げられた。そこで彼は味をしめたのだろう。徐々に書く内容に私にはない彼独自の個性とでもいうべきものが際立つようになつた。それは私にとつても意外な結果でもあり嬉しい誤算だつた。ファンは増えていき、売れっ子作家としての道を歩むことができたからだ。本来は自分の鬱憤を吐き出し、ているだけのものではあるのだが、それが万人に受け入れられる。こんなに嬉しいことはない。これはつまり私が作った小説家としての彼、つまり彼というキャラが世間に受け入れられたことに等しいから。どの作品の登場人物が受け入れられることよりも喜ばしいことだつた。このまま彼が彼のまま世間に受け入れ続けることを願つた。だけどそれがそもそもの間違ひだつた。世間は一度認識したキャラをなかなか手放そうとしない。固定概念にとらわれて上塗り作業だけを行う。ようするに彼は私の手を完全に離れ世間の手に納ま

ってしまつた。どうにもできずにうだうだや
っている。とどんどん彼は私から離れていった。
今ではもう彼という確固たる個人がいること
になつてゐる。どんなに彼のキャラを変えよ
うとしても世間が許さない。私自身が彼に変
わつて作品を書いても彼っぽくないとバツシ
ングを受ける。彼が世間に彼を受け入れさせ
るのではなく世間が彼という個人を確定させ
てしまつた。彼は世間が求める形に集約して
しまつた。私イコール彼という図式はこうし
て成り立たなくなつてしまつた。そうなつて
くると小説家ではない私はどうすればいいの
かわからなくなつてくる。存在意義をなくし
てしまふ。彼がいたことで自分の価値を見出
すことができてゐることに気付いてしまつた
からだ。それと同時に彼が私の手から離れて
しまつたせいで私としての大部分は彼に狂わ
されてしまつたことにも気付いた。彼以外の
キャラで書こうとしても彼の文癖になつてし
まい、最終的に彼の作品の疑似品となつてし

まう。だから私は私として書くことを諦めて
しまった。
そのうち彼は私以外にも多大な影響を与え
るようになってしまった。それがとても、む
かつく。ああ、言葉が荒くなってしまった。
駄目だ駄目だ、落ち着こう。感情を表立って
書くなんてまるで彼ではないか。落ち着け。
まあとにかく、これは嫉妬だ。理解はしてい
る。納得はしていないが理解はしている。だ
から理不尽な感情だとは思っていても物理的
に彼をぶん殴ってやりたかった。それが無理
なことはわかっている。だからこそ私はこう
して一度諦めた文章で彼を殺すことにした。
彼が苦手としてゐる死を俺が――私が彼に与
えようと思つたのだ。いい皮肉だろ？　しか
し殺すにはまず私としての文を書かないとい
けなかつた。だがそうするとどうしても彼に、
彼の文になつてしまふ。そうなつては己で己
を殺させることになつてしまふ。わざわざ彼
自身の手によつて死を気付かせることなんて

ことは私には我慢ならない。だから私は稚拙な文章で彼にならないよう細心の注意を払い、こうして書いている。たとえば彼としての部分が出たとしてもこれは彼が苦手としている死を書いていくものだから影響は普段よりも少ないはずだ。ましてミステリーという枠でも縛られている彼には介入することはできないはずだ。限りなく私としての文であるはずだ。そうでなければ意味がない。そうでなければこれが遺書としての意味をなさない。そうだ。これは彼を殺すにあたって私の手による遺書なのだ。そして殺害予告でもある。こうして書き記しておくことで私の彼、その本当の意味も価値もわかっていない世間の馬鹿野郎どもに彼が終わったことを伝えたいのだ。終わりにさせるのだ。私の手によって。正直ここまで書いていてもこれは彼が書いているのではないかと危惧している。原稿用紙を握りつぶしたくなる。だがそんなことを続けてはいけないうつになっても彼を殺すことはできない。

彼を殺せない。私が死ねない。だから不満があつたとしても、不安があつたとしてもこのままの状態にしておこうと思う。手も加える気はない。いつ彼がこの文を狂わせるか分からないから。一度言葉にしてしまふと不安というものはなかなかぬぐえない。自分が失敗してしまふのではないかと、彼は私の納得のいかない作品を出し続けていくのではないかと怖くなつてくる。ああ、このままでは潰れてしまひそうだ。己の決意が逸れてしまひそうだ。だからここで筆を止めよう。終わりにしよう。これで私の気持ちを書いたと満足したことにしよう。最期の締め切りだ。筆を置いたら私は縄に手をかけることになるだろう。誰が最初に私の覚悟の形を見つけるのかは分からないが、それよりもなによりもこの遺書が遺書として機能することを切に願う。それではさようなら。

私



大
喝
采



「さあ皆さん、どうでしたでしょうか。これだけの拍手を聞くに満足していただけたようですよ。さて、ここでは無粋ですのであえて名前には伏せさせてもらいますが、これは先日亡くなったご高名な小説家の最後の『作品』です。最後に身体を張って新しい作品を書いてくれました。作家の鏡です！彼に賛辞の拍手を送りましょう。さて、この作品は何と言っても彼の苦手としていた死を描いている。これはすばらしいの一言に尽きるでしょう！さあて、それでは皆さんお待ちかね、今からこの作品を競にかけます。誰がこの作品『遺書』を手に入れるのでしょうか。一億からスタートとさせていただきます。それではスタート！おっと、いきなり三億でした！さらに額がはね上がって五億でした。さらに上の五億五千。八億五千。なんと十億でました。十二億、十二億八千、十三億。まだ額は上がっていきます。出た、二十億！一体誰が彼の作品を手に入れるのか、額はま

だ
ま
だ
上
が
っ
て
い
き
ま
す
ー
ー
」